

ブファリーニ礼拝堂とカラファ礼拝堂

—1480年代にローマで制作された両装飾壁画の視覚的類縁性をめぐって—

荒木 文果 (ローマ第一大学)

1480年代前半、ペルージャの画家ベルナルド・ピントリッキオ(1454-1513)は、カンピドーリオ広場に隣接するアラチェリ教会(フランチェスコ会)で、ブファリーニ礼拝堂壁画装飾を行った。本礼拝堂は1450年に列聖されたフランチェスコ会の聖人シエナのベルナルディーノに捧げられ、その壁面に描かれた聖人伝には、聖人称揚のための図像プログラムが用意された。続く80年代後半、フィレンツェの画家フィリッピーノ・リッピ(1457/58-1504)が、パンテオンに程近いミネルヴァ教会(ドメニコ会)で、受胎告知の聖母とドメニコ会の聖人トマス・アクィナスに捧げられたカラファ礼拝堂装飾壁画を制作した。両壁画に関しては、空間構成やグロテスク装飾における類縁性が度々指摘されている。しかし、それらは常にフィリッピーノの芸術的関心と共に語られるだけであった。それに対し本発表では、両礼拝堂のある教会が、当時ローマ都市部での二大托鉢修道会の布教の本拠地であった点、両壁画の地理的及び年代的近接に注目し、その類縁性がフランチェスコ会とドメニコ会の競合意識の中で誕生したと考えられることを明らかにする。

発表ではまず、両壁画における聖人伝の展開方法や構図、風景表現を中心に考察し、フィリッピーノがカラファ礼拝堂壁画を構想する際、従来の指摘以上に、ブファリーニ礼拝堂壁画を念頭に置いていた点を確認する。この過程で、画家がブファリーニ礼拝堂壁画との視覚的類縁性を保持しようとした結果、カラファ礼拝堂右壁面ルネッタ部分及び祭壇壁面の特異な図像表現が生じたことが明らかとなる。一方、カラファ礼拝堂壁画の注文主オリヴィエロ・カラファ枢機卿(1430-1511)と画家フィリッピーノの書簡からは、礼拝堂装飾に注文主カラファの意向が強く反映していたことが伺われる。そして実際に、聖ベルナルディーノを称揚するブファリーニ礼拝堂壁画自体が、ドメニコ会保護枢機卿であったカラファの関心を引くものであったことを指摘する。聖ベルナルディーノは生前幾度も異端者として非難された人物であるが、彼を最も激しく糾弾していたのはドメニコ会士たちだったのだ。さらに、ブファリーニ礼拝堂壁画においてベルナルディーノの正当性を明白に宣言する場面に描かれたドメニコ会士の存在意義等を考察することで、カラファ礼拝堂壁画はブファリーニ礼拝堂壁画に対するドメニコ会側の応答として理解されるべきであることを提言する。

二大托鉢修道会の美術パトロネージにおける競合意識はこれまでも指摘されてきたが、本発表によって両壁画も同様の意識の中で制作された点を示されるであろう。本発表は同時に、ヴァザーリの酷評以来、当時の名声や革新性が正当に評価されてこなかったピントリッキオ芸術を再評価する近年の動向の一端を担うものでもある。